



# 初瀬の場合

炭酸140%

# 初瀬の場合



# 目次

プロローグ	5
第一章	11
第二章	26
第三章	37
エピローグ	56
◇	
おまけページ	65



## プロローグ

「「お疲れさまでした！」」

号令が済むと、開放感からか他愛ない会話が始まる。

アドバイスを聞いたり、先に控えた試合を気にする者。中にはそのまま自主練習の準備を始める者もいれば、急ぎ帰路に着こうとしたりと人によってさまざまだ。

学年末テストを経て卒業式を過ぎ、天気予報では春一番が予測される頃。

それらの風景は初瀬麻里安にとってすっかり馴染みあるものになっていた。

皆、自分の意思に沿って、てきぱきと動いている。せめて道具の片付けだけでも手

伝おうと麻里安は輪の中へ入っていった。

三十人分の道具はそれなりに量も重さもあり、クールダウンも兼ねられるほどにはちょうどいい運動になる。

区切りがついたところで帰宅組は部室へ向かう。麻里安は居残り練習も視野に入れていたが帰ることにした、皆の背中についていく。

——授業でわかりにくいところがあったから、復習しておきたいし……。

そう考えながら部室へと入る。

「で、監督にチョコあげた人ってどれくらいいるの？」

聞こえてきたのは花山栄美の声だった。一足早く戻っていたらしい新田美奈子と話している。

「お疲れさまです」とやりとりをしつつ、麻里安は自身のロッカーを開け、着替え始

めた。

「さーねー、渡す人は渡したんじゃない？ お世話になってるって意味でもさ。しっかし突然どしたの」

「だってもうすぐホワイトデーじゃん！ 女の子だったら気にもなるって！」

「そーいやそんな時期だねー」

「新田ちゃんだって坂上ちゃんからチョコ貰ったんだし、なにかお返ししないとじゃない？」

「むむむ、坂上以外からも貰ってるかんね……。あ、そーいや栄美って、わたしにくれたっけ？」

「ちよつとお、チョーカワイくてバラエティあふれる詰め合わせあげたでしょ！ とぼけようとしてもダメなんだから！」

「そうだったかいのお……。ほっほっほ」

「もー！」

意識せずとも耳に入ってきてしまうその話題。いつもなら聞き流せる仲むつまじい二人のおしやべり。

——バレンタインとホワイトデー。親しい人々に感謝を伝える日。女性が男性に愛を告白したり、チョコレートやクッキーの購入数が格段に跳ね上がる行事。

ふと手を止めてしまいそうになるが、機械のような思考回路に切り替えて気を逸らす。

手早く準備を済ませ、麻里安は部員たちに別れの挨拶をしながら部室を出た。

橙色の空にはゆつくりと藍色が混じり始めている。

家路をたどりながら、麻里安は頭を巡らせた。

ひと月前のこと、監督にバレンタインのチョコレートを渡すことを諦めた。

しかし日が経つにつれて後悔の念がじわり、じわりと麻里安の心を侵食していた。

「主人公」である彼女とは明確に違っていたはずの、手作りのチョコスコーンに込めた想い。

時間とともに膨れ始めた本当の気持ち。それを表すのは、してはいけないことだと感じていた。

彼女の内情を察して、はっきりと知ってしまったから。そう自身に言い聞かせ続けている。

——いつまで、こんな気持ちのままなのかな。

麻里安にとっては考えたくない事柄だった。自然とうつむき加減になってしまった。そのせいか、道端のところどころ芽を出すフキノトウが目についた。

独特の苦さを想う。今の心の味に当てはまる気がして、麻里安は力なく笑った。



彼女に伝えた思いやりの言葉がある。暗唱できるほど好きな小説の一節だ。

「初瀬さんがいなかったら」と感謝まで述べられた行動。

仲良きことは美しきかな。はにかむ少女と青年。

二人の物語はハッピーエンドの予兆を残し、おしまいを迎えたのだろう。

——けれど、私の胸の高鳴りは、あの時から抑まらないままで。

## 第一章

その日は快晴だった。

練習途中の全体ミーティング。久しぶりの心地よい天候に恵まれたおかげか、部員たちは朗らかな雰囲気だ。

ミーティング後は守備力の強化のため、まずシートノックが行われることになった。ノツカーは東雲龍。

「それじゃあ、みんなポジションについてー！」

有原翼の合図を皮切りに、それぞれの守備位置へと散っていく。頃合いを見て龍が切り出す。

「まずはファースト！ 行くわよ！」

監督のトスに合わせ小気味よい打球音を響かせる。

野手は捕球したのち、待機している捕手へ返球し、一人三球ずつで交代する。

中には捕り損ねてしまう部員もいるが、おおむね順調に進んでいる。

「天草さん！ 送球のときは下半身を安定させるように！」

龍は選手を見極める心づもりもあるらしい。いつにも増して打球は鋭く、速い。

ベース付近だけでなく塁間やコーチャーズボックス側へ割り振ったり、部員の守備範囲に合わせてギリギリのノックを打つ。

「次、セカンド！」

続々と送り出される打球と返球。

日が徐々に伸びているとはいえ、まだ冬の気配を残している。全体練習ができる時

間はそう長くない。

月末に行われる春大会はもちろん、週末にはともにトーナメントへ名を連ねる学校との練習試合もあるせいか、練習内容は厳しくなりつつある。

誰がスタメンや控えになるのか。特に三月に入ってから、個人の力量を推し量る選考会と表しても過言ではなかった。

シートノックはどうしても守備側の待ち時間が多い。だが、その間にもポジションごとに肩慣らしついでのカヤツチボールや、送球動作を確認したりと、皆が励んでいた。

そんな中、麻里安はひとり、集中できていなかった。

他の部員の様子を観察するでもなく、大きく身体を使うでもなく。手首や足首を軽く回したり伸ばしたり、漠然とストレッチらしい動きをするだけだった。

——明日が来なければいいのに。ううん、世界が無くなってしまえば……なんて。

我ながら子供じみた考え方だと苦笑する。

ずっと答えは決まっている。改めてという風にはなるが、監督にチョコレートを渡せばいいだけの話だ。

笑われるかもしれない。白い目で見られるかもしれない。それでもやはり麻里安の心に影を落としている。

けれど踏み出せない。関係性が壊れてしまうのを恐れていた。

「次、サード！」

「よっしゃあああ！ バッチコーーイ!!」

岩城良美の雄叫びとグラブをバシンと叩く音で麻里安は意識を練習に戻す。

——今、考えていても仕方ないから……。集中しなきゃ、だよね。

「麻里安！ 先に受けさせてくれ！」

「はい、わかりました。どうぞ」

「うおおおお！ やるぞ!!」

断る理由はない。麻里安は素直に提案を受け入れた。

良美は他のポジションへのノックを見て何か思い当たったのか、自信に満ち溢れている。その気合は麻里安の目を惹きつけた。

キン、と快音が響く。良美は三塁ベース付近に転がった球を難なくさばいた。だが一塁へと投げてしまった。

「うわあっ!?! び、びびったわ……。天草、よく捕れたわね」

「目の前に来たからね。日頃の鍛錬の賜物つてやつかも？」

ペアになって姿勢をチェックしていた朝比奈いろはと天草琴音が対応したものの、

即座に龍から叱咤が飛んでくる。

「岩城先輩！ 塁間での練習は後でやりますから、今はこっちに返してください！」

「いやあ、すまんすまん！ ついクセでな！」

「はあ……。次、行きますよ！」

続く球はライナー。左中間まで抜けそうな勢이었다。

しかし良美の動きは俊敏で、頃合いを逃さずダイビングキャッチ。横転し間を置かず体勢を整え膝立ちで返球する。

三球目は明らかなファウルフライ。良美は捉えようと一生懸命に三塁ベンチ方面に向かう。スライディングキャッチを狙うもほんの少し届かず、そのまま地面に座り込んだ。

「はあ、ああ……。惜しかったー！ けどわかってきた、なんかわかってきたぞ！」

「岩城先輩、すごいです！ なにかコツを掴んだんですか？」

立ち上がろうとする良美に手を貸しながら麻里安は尋ねる。

「ああ、とにかくがむしゃらに……！ この球はウチにしか捕れない！ という気持ち強く持ったんだ!!」

「自分にしか捕れない……ですか」

「そうだ！ 頭のとっぺんからつま先までじつくりと！ そうしたら身体が勝手に動いたんだ！ 試してみるものだな！ わーっはっはっは！」

ボールを怖がらずに、必死に追う。守備の基礎と言われる部分を彼女は体現してみせた。

良美は取り逃したボールを捕手へ投げ返す。宝物を探し当てたような、きらめいた表情をしている。

「よし、ウチはこの感覚を忘れないために今からイメージトレーニングをする！ 麻里安、頑張れよ！」

そう言つて良美は麻里安を励ました。どうやらかなり調子が良さそうだ。

——凄いなあ。私もあんな風になれたらいいのに。

「初瀬さん、準備はいい？」

捕球役を務める鈴木和香が聞く。麻里安の番が回ってきた。

「あ、はい……お願いします！」

——岩城先輩みたいにはできないけど、基本に忠実にしよう。

初球は二塁に寄ったゴロ。跳ねながら近付いてくる打球を捉えて、タイミングを図る。グラブの切っ先で捕り、返球。

二球目は三塁後方、試合なら左翼手が請け負うかもしれないフライ。麻里安は落下地点を予測しながら走る。

捕球姿勢に入ろうとして身を翻す。しかし予測とは大きく外れ、ボールは麻里安

の五、六歩ほど手前に落ちて鈍い音を立てる。

それを慌てて拾い、返球する。しかし、足がもつれていた。

「「あつ……！！」」

複数人から声が漏れる。その球筋は左バッターボックスの近くに居る、監督目がけて飛んでいく。

監督は驚きながらも、右外へ軽くステップして避ける。幸い、かすらずに済んだ。

——私……なんて、ことを……！！

ボールは和香が後逸させず止めていた。部員たちは一斉にざわついた。

「監督さん、すみません……！ 大丈夫ですか!? ごめんなさい……！！」

大丈夫、問題ないよという監督の返答に、ひとまず胸をなで下ろす。

麻里安は全速力で走って戻り「もう一球、お願いします！」と叫んだ。

三球目。打球は一直線に迫ってくる。麻里安は腰を落とし、捕球の体勢を取る。だが失敗し落球した。虚しくも転がっていく球をもぎ取るように掴み、麻里安は返球した。

「……今日が試合じゃなくて本当に良かったわ」

龍が呟いた。それは誰にも聞こえず、冷えた空気に溶けていった。



すべてのポジションでノックが終わった。十五分の休憩時間に入る。

——ダメだ。何も、考えられないよ……。

麻里安は崩れるようにベンチに座った。混乱、些細なミス、暴投。その原因は明らかだ。

彼を目にすると心が揺らぐ。どうしても頭をよぎる、後悔の念。

眼鏡を太ももに乗せ、タオルを押しつけるようにして顔をうずめる。

季節を問わず咲き続ける大輪のひまわりさえも、自分を責めているような気がした。

何も見たくなかった。この場から消えてしまいたい、そんな風に考えてしまう。

「初瀬さん。ちょっといいかしら」

涼しい龍の声。だがそこには怒りが込められていることを麻里安は悟った。

どうにか話を聞こうと眼鏡をかける。

急速に取り戻された鮮明な視界は極彩色で、現実を直視させる。

「……はい」

「はつきりと言わせて貰うわ。先月の終わり頃からミスが目立っている。なのに自主練もほとんどせず、アドバイスを求めることもない。どういうことかしら？」

事実だった。勉強はまだしも、部活では思うように動けない。監督の姿が目に入るたび、とてつもない後ろめたさが襲ってくるのだ。

麻里安は膝頭を強く握り、ひたすらに耐える。

「今日は特に酷いわね。サボり魔の二人でさえ待ち時間に行動していたわ。それに引

きかえ、貴女はただボーツとしていた」

「……すみません」

「謝罪の意を確認してきたわけではないのだけれど。初瀬さん、貴女は何をするためにここに居るの？」

麻里安はかすれた声でそつと言葉を紡ぐ。

「野球、で……もつと上手くなって、皆さんの、お役に……立ちたいと……。ごめん、なさい……」

視界が滲む。同時に喉や胃が締めつけられる感覚。

——泣いても、意味なんて、ない……！

目をつむって必死にこらえる。だが、ついに溢れ出た涙が麻里安の頬を伝う。

せめて、むせび泣くまいとして、頭を下げ肩をすくめ昂ぶりが静まるのを待った。

刹那の沈黙。そうして龍が告げる。

「……解っているのなら、休憩が終わったら少しでいいから気を張って頂戴」

麻里安の様子を見て真剣さを感じとったのか、棘は抜けている。

誰かが龍を呼んでいた。彼女はその場を離れようとし、足を進めたと思いきや振り返る。と、どこかバツが悪そうに言った。

「それから、その……。いえ、なんでもないわ。それじゃあ、また」

遠ざかる足音。気配が消えるまで麻里安は身を堅く保っていた。

強く意識しながら、麻里安は深呼吸を繰り返す。

周囲のざわめきが湖面に降りそそぐ雨粒のごとく不規則な間隔で交わり、邪魔をする。

打順。送球。盗塁。牽制。守備。

野球用語だけがイヤに耳に刺さる。